

日本遺伝学会 第81回大会 一般演題を募集するシンポジウム・ワークショップ一覧

テーマ名	世話人	演題名	招待演者名	演者所属	概要
遺伝学が解き明かす細胞内オルガネラのダイナミクス	有村 慎一（東京大） 松永 幸大（大阪大）	植物の雄性配偶体形成におけるオルガネラDNAのダイナミクス	坂本 亘		GFPのノーベル賞を例にするまでもなく、近年のライブセルイメージングの進展により、細胞内オルガネラ動態における数々の新知見が得られている。さらに、正逆遺伝学を組み合わせることで、細胞内オルガネラのダイナミクスを司る分子の同定やメカニズムの解明から統合的なシステムの理解へと発展している。本ワークショップでは細胞内オルガネラ研究分野における最先端研究を紹介・議論するとともに新しい研究方向性を見出したい。
		核内スキャホールドタンパク質による微小管ダイナミクス制御	松永 幸大		
		植物ミトコンドリアの分裂を司る遺伝子群とそのメカニズム	有村 慎一		
		線虫初期胚における中心体配置のオルガネラ綱引きモデル	木村 暁		
核ダイナミクス研究の新展開	深川 竜郎（遺伝研） 野々村 賢一（遺伝研）	羊膜類におけるゲノム構造の区画化と核型進化・核ダイナミクスと核型進化研究の融合を目指して	松田 洋一	名古屋大学	真核生物の細胞核は、高度に組織化されたダイナミックな構造体である。この構造に基づくクロマチンの核内収納は多様な遺伝子発現制御の分子基盤となっている。さらに、分裂期での染色体構造とも密接に関連している。近年、細胞機能に対応した核構造の変化や、核構造を構成するタンパク質についての情報が加速度的に蓄積してきている。そこで本ワークショップでは、動物および植物細胞を対象として核内構造のダイナミクスの重要性を念頭において研究を進めている多様な研究者と活発な意見交換を行い、この分野の現在および将来の展開について議論したい。
		染色体ダイナミクスを介したShh遺伝子の動的発現制御	天野 孝紀	国立遺伝学研究所	
		植物生殖細胞の初期発生過程における染色体ダイナミクス	野々村賢一	国立遺伝学研究所	
		脊椎動物のアクチン関連タンパク質による染色体・細胞核機能構造の形成	原田 昌彦	東北大学	
		核内ダイナミクスの基盤となるセントロメア構造	深川 竜郎	国立遺伝学研究所	
DNA損傷応答と染色体トーレンス	菱田 卓（大阪大） 篠原 彰（大阪大）	環境レベルの紫外線によるDNA損傷応答	菱田 卓	阪大微研	DNA修復は、遺伝情報の正確な継承に重要な役割を果たしている。DNA損傷を効率良く認識し、染色体環境に最適化された形で修復する。これらDNA損傷応答（あるいは染色体損傷応答）とトーレンスの分子メカニズムは不明な点が多多い。加えて、DNA修復は細胞周期、チェックポイントを介して厳密に制御されている。また、近年、ゲノム不安定性を示す病気との関連から注目されている。本ワークショップは、DNA損傷応答と染色体トーレンスとしてのDNA修復や組換えの仕組みを俯瞰しつつ、それらの連係や相関について、最新の知見を議論することを目的とする。最新の情報を議論するため、多くの一般演題から発表者を募ることを予定している。
		コンデンシンによる転写抑制	定塚 勝樹	基生研	
		植物オルガネラゲノム再編成の抑制	小田原 真樹	立教大	
		CDKによる非相同末端結合の新規制御メカニズムの解析	松壽 健一郎	阪大蛋白質	
		Timing and Spacing of Post-replication Repair	大学 保一	Cancer Research UK, London Research Institute Clare Hall Laboratories	
モデル動物におけるトランスボゾン	浦崎 明宏(遺伝研) 川上 浩一(遺伝研)		笹倉 靖徳		トランスボゾンは微生物、植物、無脊椎動物の遺伝学研究において重要な役割を果たしてきた。しかしながら、脊椎動物においてはトランスボゾンを使った方法論は長い間開発されてこなかった。最近になり、ようやく脊椎動物で活性のあるトランスボゾンが利用できるようになってきた。本ワークショップでは、主に脊椎動物を中心にモデル動物におけるトランスボゾンについて最近の話題を提供して頂き、今後の発展について議論する。
			藤原 晴彦		
			北田 一博		
			國府 力		
			浦崎 明宏		
量的形質研究の展望	斎藤成也（遺伝研）	量的形質と離散形質を対比しつつ、それらの研究史を概観する	斎藤 成也	国立遺伝学研究所	メンデルの遺伝法則が再発見されてから100年以上たつたが、離散的形質の遺伝的要因については大きな進歩があったものの、量的形質については、Fisherの古典的論文以降、本質的な進歩がないように見受けられる。量的形質の代表的なものである身長についても、近年のゲノム規模連関研究によって候補遺伝子が発見されたが、以前から多くの研究で推定されている高い遺伝率を説明するにはいたっていないという批判がある。そこで、量的形質の遺伝的要因を探る研究の歴史をふりかえりつつ、研究の現状と将来の展望について議論したい
		QTLをはじめとする量的形質の研究方法を概観する	高野 敏行	国立遺伝学研究所	
		めだかの顔貌を決定する遺伝子群の探索について現状を話す	新屋 みのり	国立遺伝学研究所	
		人間の髪の毛の形質を決定する遺伝子群の探索について現状を話す	木村 亮介	琉球大学	